

実践を理論で読み解き、語り合う

神経難病の患者へのかかわりに 込められた「臨床の知」

東京慈恵会医科大学大学院医学研究科看護 学専攻

佐藤紀子 (司会)

日本医科大学付属病院

蓼田千尋 (事例提供)

東京女子医科大学八千代医療センター

三好麻実子

和洋女子大学看護学部

大谷則子

千葉市立海浜病院

佐久間和幸

本記事はNEOセミナー「臨床の「知」を語り合う (10月15日開催)」の誌上再現です。セミナーでは、日本医科大学付属病院看護部 蓼田千尋様 (臨床経験17年目) が、印象に残っている場面を事例として提供していただき、2人のファシリテーターに看護理論とひもづけながら解釈をいただきました。その後、全体にてさらに事例、解釈について討議を重ねました。事例、解釈、討議 (抜粋) の順に紹介します。

実践と理論の往還、そして看護の「臨床の知」について、語り合うことの魅力をお届けできれば幸いです。

(「看護教育」編集室)

事例：全介助の方へさらなるリハビリの提案

A氏は、神経難病で入院している女性患者、40代。入院前は夫と娘2人と暮らす専業主婦である。入院後、血漿交換や免疫グロブリン大量療法が行われたが、わずかに指先が動く程度で、四肢麻痺、疼痛を伴うしびれがある。ADLは全介助で、清潔ケアや体位変換時は「ゆっくりやってね。痛いし、怖い。ああ怖い」と恐怖心を示していた。私たち看護師は細心の注意を払い、2名以上でゆっくりと、患者の訴え1つひとつを確認し、ケアを行うことにしていた。意識ははっきりしているのに自分の意思で身体が動かせないぶん、枕の微妙な位置や足の向きなど患者のニーズは他の患者に比べて多かったかもしれない。1つの行為に時間を要するため、看護師のなかにはA氏のケアに疲弊し苦手意識をもつ者もいた。

私はA氏を受け持つ機会も多く、娘の受験のことや、アイドルの話など、何気ない会話のなかでも少しでも笑顔が見られるようにかかわろうとしていた。更衣の工夫をともに考えたり、ニーズがうまく充足できたときは患者と喜びを共感し合い、スタッフが対応に困る場面でも、A氏自らが私を呼んでくださり解決するなど、A氏への看護に楽しさや、やりがいを感じていた。

印象に残った場面は、理学療法士とベッドアップで座位訓練をしているときである。リハビリテーション (以下、リハビリ) は毎日行われているが、離床は進んでいない状況であった。疼痛増強や背面開放への恐怖が離床を阻害していた。バイタルサインの変化はなく、なんとか次のステップに進めないかと思い、「私たちがしっかり支えるから、ベッドの端に腰かけてみませ

んか」と提案した。拒否されるかもしれないと思ったものの、A氏は「やってみようかな」と表情こそ不安げながら私の提案に同意してくれた。

理学療法士の主導のもと、ゆっくりと端坐位になり私と理学療法士がA氏の両脇から支えるように3人でベッドサイドに座った。不安定さはなく座位保持ができ、私が「すごいですね、私も嬉しい」と伝え、
「やってみてよかった。ありがとう」と涙しながら笑って返事をしてくださった。その笑顔を見て、私自身も心から嬉しかったし、看護師として関わることでよかったと率直に感じた。

その後、A氏は入院期間こそ要したが、車椅子乗車やトイレでの排泄など段階的に離床を進めることができ、リハビリ病院へ転院された。

振り返ってみると、私の「離床を進めたい」という考えにA氏をあてはめてしまい、少し強引だったかもしれない。消極的な患者にとっては、身体的側面から看護師が離床を進められると判断しても、患者の恐怖心が勝っていれば逆効果となってしまうからである。神経難病患者においては、慢性的に緩やかに経過する症状のなかで漠然とした今後の不安や死への恐怖も強い。毎日の関わりのなかで体が動かない、痛いと言う患者の身体的、精神的苦痛や不安に常に関心を寄せることが重要であると感じた。さらには、どうすれば安楽か、その人らしさをつくれるかを考えること、またそれを患者とともに考えることで信頼関係を築き、QOL向上にもつながるのではないかと感じる場面となった。

(蓑田氏提供事例)

解説1：相互作用があらわれるとき

この事例は、「ともに」という思いが詰まった看護であると感じた。それは蓑田さんが日頃から看護を実践するなかで、大切にしているキーワードなのではないかと思う。

事例の患者さんは神経難病の患者として、これから疾患とともに生きていく方である。蓑田さんは多くの

慢性疾患患者を看ているベテランであると同時に、看護業務をただこなすことなく、1人の患者をしっかりと看ていると感じた。この原動力と、業務としての看護に慣れない感性が素晴らしい実践者である。

事例のなかで「ニードは他の患者に比べて多かったかもしれない」「1つの行為に時間を要するため、看護師のなかにはA氏のケアに疲弊し、苦手意識をもつ者もいた」という記載があるが、このような情報をキャッチすると、多くの看護師は「大変な患者である」と断定的に決めつけてしまう可能性がある。しかし、蓑田さんは「娘の受験のことや、アイドルの話など、何気ない会話のなかで少しでも笑顔が見られるようにかかわろうとしていた」。ここから、患者を知ることに関心を抱き、先の見えない闘病生活に対して、ともに寄り添う姿勢が伝わってきた。

リハビリの場面では、「私がしっかりと支えるからベッドの端に腰をかけてみませんか」と提案し、A氏は「やってみようかな」と答える。こうしたやり取りから、患者の認知・行動変容を促している。そして、そのアプローチの前提として、蓑田さんは患者の日々の生活のなかから、今日は可能なステップであると判断し、声かけの前に患者の思いをアセスメントして「今日はいける」と判断していたのではないかと考える。

実際にリハビリの場面では、「A氏の両脇を支えるように3人でベッドサイドに座った」。ここでも、患者の不安を取り除くかかわりがあったのではないかと考える。蓑田さんは、自分がすぐに支えることのできる、患者に安心感を与える距離を保っていたのではないかと考える。その結果、蓑田さんが大切にしている「ともに」の看護実践が埋め込まれていると考える。

蓑田さんが「すごいですね、私も嬉しい」と伝え、患者は「やってみてよかった。ありがとう」と、涙ながらの笑顔を見せた。この瞬間が、看護の醍醐味であり、喜びと同時に相互作用が芽生えた瞬間である。

オレムはセルフケア (self-care) について、機能と発達の調整に対するその人自身のニードを充実するために、継続して気を配り、必要なものを提供すること¹⁾と述べている。



佐藤紀子氏



蓑田千尋氏



三好麻実子氏

蓑田さんも、事前に患者に耳を傾け日常生活の話のなかから全人的（身体的、精神的、社会的）なアセスメントを実践していたと考える。そして、患者のセルフケアを促すためにかかわったといえる。

また、アーネスティン・ウィーデンバックは、「援助へのニード（need for help）とは、個人が求め望んでいる手段あるいは行為であり、個人がそのときの状況においてもっている要求に対応できる能力を取り戻し、さらにそれを高めていくための力となりうるものである」²⁾と述べている。蓑田さんは寄り添うことで、患者の無意識の不安まで容認して、次のステップへの準備と意欲を支え、能力を高めている。

（佐久間和幸）

解説2：身体に根差した知性

蓑田さんのA氏とのかかわりの場面には、ケアがあふれている。蓑田さんは、身体を使って患者に直接触れながら声をかけている。リディア・E・ホールは、ケアはケア提供者の身体を使うことによってのみ可能となるという点を強調しており^{3,4)}、蓑田さんが日常的にA氏の身体に触れたり、ケアの方法を試行錯誤したりする姿そのものがケアなのだということがわかる。

また、蓑田さんはA氏の離床への第一歩として端坐位保持を行っている。このケアを通じて「すごいですね。私も嬉しい」と蓑田さんは気持ちをA氏に伝えている。この嬉しい気持ちについて考えてみる。

ミルトン・メイヤロフは、ケアは相互作用を生み出すものだとし、ケアとは相手の成長を助けること

であり、その結果としてケアする者の自己実現が果たせるのだと説いた⁵⁾。蓑田さんの嬉しい気持ちに対してA氏は涙を流しながら笑顔で返答している。この瞬間に、A氏の離床への第一歩は奏功すると同時に、ケアする者である蓑田さん自身の自己実現が果たされたのだということがわかる。

蓑田さんはA氏の看護にやりがいを見いだしている。これは蓑田さんがA氏に関心をもってかかわろうとする姿勢が基盤となっている。パトリシア・ベナーは、患者の状況に巻き込まれ関与することを気づかいであると説き、気づかうことによって人は状況の内に身を置き、気づかいを通じて関心が生み出されるのだと述べている⁶⁾。

蓑田さんはA氏への気づかいから、A氏の状況に巻き込まれつつ関与していることが事例全体をとおして読みとれる。ベナーは気づかいが熟練した技能活動であり、それ自体が知の様式であることを示した。つまり、蓑田さんのA氏とのかかわりの場面は、蓑田さんの身体に根差した知性によって生み出された熟練した技能活動であるといえる。

（大谷則子）

話し合い：実践と理論を結び付けて得られること

佐藤 ここからは、事例、2つの解説をもとにみなさんと話し合っていきたいと思います。まず蓑田さんに、佐久間さん、大谷さんの解説からどのようなことを感じられたかお聞きしましょう。

蓑田 事例としてまとめていたとき「実践してよかつ



大谷則子氏



佐久間和幸氏

た、めでたしめでたし」という自己満足な内容になっていないかな、と悩んでいました。けれど、こうして理論で説明されながら振り返っていただくと、自分の実践の1つひとつに意味があったと感じられて、自信になりました。メイヤロフの、「相手の成長を助けることが、結果としてケアする者、私自身の自己実現につながっていく」という考え方がとても励みになります。

佐藤 私は長年、さまざまなかたちで事例検討をしてきましたが、どれも本当に教科書に載るようなすばらしい看護実践ばかりです。実践から看護理論が生まれるわけだから当たり前ともいえますが、自分ではなかなか気づきにくいことでも、他者からの解釈を言ってもらえると、腑に落ちるんですね。

●業務の忙しさと継続した関心

三好 A氏について書かれていることから、もしかすると他の看護師もかかわることに二の足を踏んでしまうような方ではないかな、と感じました。蓑田さんは、継続的に関心をもってかかわることができていたと思うのですが、その原動力をもう少し教えてほしいです。私も、そういう関心がもてるように、スタッフに声をかけていきたいと思いました。

蓑田 原動力……そうですね、患者さんらしさを支えられるように、1人ひとりの患者さんにしっかりかかわることを大切にしています。いつもそうした実践ができていくわけではなくて、「ナースコールが鳴りっぱなし」という状況も往々にしてあります。ただ、私の業務の忙しさは、患者さんには関係ないという気持ちはずっと昔から大切にしています。私たちはすぐに優先順位をつけてしまいがちですが、患者さんにとっては、

10分でも1分でも長いのは長いつて感じますから。

佐藤 業務の忙しさは患者さんには関係ない、という看護師としてのフィロソフィー、すごいと思います。そういう気持ちをもって就職しても、新人時代はうまくできないし、ベテランになってくると、業務の大変さが前面に出てしまって、つい忘れてしまいがちです。自己実現というか、看護師としての仕事を思う存分発揮できている感覚をふだんからもっていないと、なかなか言えない言葉だと思います。きっと現場で働く看護師たちが仕事を継続するためには、そうした醍醐味をしっかりと感じる必要があると感じました。

●身体にある「臨床の知」

佐藤 参加者の方から質問や感想はありますか。

参加者 専門学校で教員をしています。私も20代のころ、神経内科に勤務してALSや神経難病の方の看護を看護していくなかで、患者さんの細かな要求まで応えたい気持ちと、業務の忙しさのやりくりのなかで葛藤して、自分の仕事に迷った時期がありました。A氏との関係性のなかで「今日、次のステップに行こう」と感じられたきっかけのようなものがあつたら、お話しただけならうれしいです。

蓑田 長坐位のリハビリは続けていましたが、A氏はそこから足をおろすとか、背もたれがなくなることに、恐怖心を強く抱かれていました。ただ、支えていれば、少し体幹が保持できるようにもなっていたし、リハビリ病院への転院も考える必要があつたので、患者さんにとってできること、少しずつでも成功体験を積み重ねて、というところがきっかけですね。

参加者 その場だけの判断ではなくて、患者さんのこ

れまで、これからもふまえたうえでのタイミングだったんですね。ヴァージニア・ヘンダーソンの「その人のなかに入り込んで、皮膚の内側に入る形でその人を感じる」という言葉が思い浮かびます。医学的なニーズだけではなく、その人の心情や置かれている環境もつかみとる感覚が蓑田さんにあふれるばかりに出ていたように感じました。

佐藤 今がそのタイミングだという判断、本当に「臨床の知」だと思います。大谷さんが、リディア・ホールを引用して、身体を使って行う実践こそケアであると指摘してくれました。

大谷 ホールの理論は和訳されていなくて、教科書からの引用となりましたが、「身体を使う」のは、私たちのすごく大切な知の様式だと思います。日頃、身体をつかった相互作用が起きていなければ、今回の事例のように「今ならいけるかもしれない」というきっかけも生まれなかったと思います。時間をかけて、ていねいに身体をつかって実践されたと考えました。

佐藤 きっと、データや頭だけで判断しても、こうはできないんですね。看護師が患者さんをアセスメントする、理解していくのと、たとえば臨床心理士が理解していくのと、何が違うのかを考えてみると、看護師は身体を使うところだとすごく思います。今回の事例は、1人ひとりの看護師が身体にもっている知についても、深く考える機会となりました。やはり事例検討はとても楽しいですし、意義が大きいと思います。みなさんいかがでしたか。

●解釈し、伝え合う喜び

三好 臨床でも、事例研究をすることがありますが、その結果、看護師が元気になっていく、ということになかなかつながりません。ふだん、当たり前のように行われている実践について、こうして理論と紐づけて考えていくことは、とても参考になるように思いました。また、それは、学校の先生たち、基礎教育の先生たちとやりとりして、そういったところで結び付けていける機会があるといいなって、あらためて思いました。

佐久間 今まで、自分も大学の教員として、学生に、

理論を用いて自分の実践を分析してみようというかわりにはしてきましたが、今回初めて、第三者として、他人の実践を考えてみました。おこがましい気持ちもあったのですが、喜んでいただけてとても嬉しく、やってよかったなと心から思いました。理論の勉強はとても大変で、特に、学んだことをいつ、どう使えばいいのかが見えにくくて、学びのモチベーションが上がりづらいんです。もちろん、研究で引用する目的もあるでしょうが、こうして本当に実践とつなげる機会はとても新鮮で、またやってみたいと思います。

蓑田 いつも迷いながら、葛藤を抱えながら実践しているの、こうして解釈をいただいてとてもうれしかったです。新人のころ、患者さんをとても大切に、密にかかわる先輩たちの姿勢をみていました。そのなかで得た経験が今の私をつくっているのだと思います。『アルプスの少女ハイジ』で、クララが立ったという場面がとても好きなのですが、何かをできたという感動は自分の原動力になっています。私の今まで培ってきた経験の意味を考え直すという意味でも、たくさん学ばせていただきました。

【引用文献】

- 1) ドロセア・E.オレム著／小野寺杜紀訳：オレム看護論——看護実践における基本概念（第3版）. 医学書院, pp.19-20, 医学書院, 1998.
- 2) アーネスティン・ウィーデンバック著／外口玉子, 池田明子訳：臨床看護の本質——患者援助の技術. 現代社, p.18, 2016.
- 3) 茂野香おる他：系統看護学講座 専門分野I 基礎看護学 [1] 看護学概論（第17版）. 医学書院, 2020.
- 4) 川嶋みどり：今、看護の本流を問う意味. 日本看護技術学会誌, 14 (2), 134-136, 2015.
- 5) ミルトン・メイヤロフ著／田村真, 向野宣之訳：ケアの本質——生きることの意味. ゆみ出版, 1987.
- 6) パトリシア・ベナー, ジュディス・ルーベル著／難波卓志訳：ベナー／ルーベル——現象学的人間論と看護. 医学書院, 1999.